

感謝の心、ありがとこの言葉。 「あいさつ」は人と人をつなぐ大切な言葉です。 私たちはこの言葉をきちんと伝えられているでしょうか。 あいさつすること、コミュニケーションが生まれます。 あいさつから始まるまちづくりを考えてみます。

あいさつを大切にしていますか

7月16日、「明るく住みよい社会をめざす」青少年のつどい」が行われ、小中学生からのメッセージ発表がありました。その中で、菊陽中学校の生徒から「感謝しています」「私が大事にしていること」という2つの発表があり、「自分を支えてくれる周りの人に感謝の気持ちを持つこと」「ありがとう」の言葉を大事にしていきたい」という話がありました。

生きていく上で、あいさつが大切なことでは、誰もが分かっていることでしょう。私たちは、子どもの頃から家庭や学校であいさつを身につけてきましたが、あいさつの大切さをどれくらい意識しているのでしょうか。

自分のあいさつを振り返ってみると、例えば「おはようございます」と言うときに、気分や体調によ

ては相手と目を合わせなかったり、不機嫌そうな顔をしたり、人によって態度を変えたりしていた経験が一度や二度はありませんか。自分にとってはその態度が「その一瞬だけ」のことかもしれない。しかし、人との出会いは一期一会ともいいます。その人と出会う機会が一生に一度しかないと思えば、気持ちを込めたあいさつをしたいものです。

あいさつは、その仕方一つで、「この人は感じの良さそうな人だな。もっと話してみたい」と思ってもらえたり、逆に「この人は不機嫌そうだな。近づきにくいな」と思わせてしまったりします。それほど、あいさつは人の印象を決め、その後の人間関係にも影響を与えるものです。

普段の生活の中で当たり前のようにしているあいさつ。この言葉から生まれるものを考えてみます。

なぜあいさつが必要なのか

「挨拶」の語源は、仏教の「一挨拶」にあるといわれます。「挨拶」という文字には、押し開く、心を開いて近づくという意味があり、「挨拶」という文字には、迫る、擦り寄るといった意味があります。つまり、あいさつとは、人と人が出会い、互いに心を開いて迫っていくことです。あいさつをして自分の心を開いて相手に話し掛けることで、コミュニケーションが生まれます。コミュニケーションは、私たちが社会生活を営む上で、人と人をつなぐとても重要なものです。あいさつは、友好な人間関係を築くための第一歩となり、コミュニケーションを深める潤滑油のような役割も果たします。

だからこそ、私たちは子どもの頃からあいさつを身につけていきます。例えば、学校生活の中でもあいさつは欠かせません。登校しからの「おはようございます」に始まり、授業の前後の「お願いします」「ありがとうございます」「いただきます」「ごちそうさまでした」、そして下校するときの「さようなら」まで、さまざまなあいさつをしています。登校時には、あいさつ運動を行っており、生徒会、保護者や先生が校門の前で「おはようございます」と呼び掛け、生徒たちとあいさつを交わします。このあいさつは、単なる受け答えではなく、「元気な一日を過ごしてほしい」という願いも含まれていることでしょう。学校は、先生、友達、

先輩、後輩や部活動の仲間など、たくさんの人たちと関わる場所です。あいさつによりコミュニケーションが始まり、さまざまな場面に応じたコミュニケーションの取り方があります。学校は、さまざまな人間関係の築き方を学ぶ場所ともいえます。 社会人になれば、職場や地域など、より多くの人と出会う機会が増えます。その中でも、コミュニケーションをとることで人とのつながりができていけば、たとえ災害が起こったときや子育てで悩んだときでも、周囲の人がきつと力を貸してくれます。私たちは、言葉を交わし、会話の一步を踏み出すことで、人との出会いの輪を広げています。全てはあいさつから始まっています。

菊陽中学校あいさつ運動



菊陽中学校では、生徒会執行部、部活動生、先生やPTA役員が、毎朝校門の前であいさつ運動をしています。2学期の期間中は、全校生徒の保護者にも希望をとって、あいさつ運動への協力をお願いします。朝から元気のいいあいさつをして、楽しい学校生活を送れるようにしましょう。

INTERVIEW



教育長
赤峰 洋次

あいさつをすると、心が通い合う気がしますね。朝も昼も夜も、明るいあいさつは自分も相手も気持ち良くさせてくれます。 あいさつは、コミュニケーションの第一歩です。あいさつには、「今日も一日頑張ろう」という思いや、「今日もよろしく」などといったさまざまな気持ちが込められているものだと思います。特に菊陽町は人口が増加していますから、あいさつはとても大事です。「あいさつ日本一」の気持ちを持ってあいさつをすると、きっと良いまちになると思いますね。 学校でも、子どもや保護者からあいさつが飛び交うような、そんな素晴らしい学校を作ってもらいたいですね。



菊陽町交通指導員
村上 力雄さん

交通指導員になって約30年になります。毎月3回、三里木駅裏の横断歩道に立って、子どもたちに交通指導を行っています。子どもたちには、「手を挙げて、右左右を見て、車がきちんと止まったことを確認してから渡ろう。そして、渡った後はお辞儀を忘れないように」と教えています。自分の身を守るだけでなく、交通マナーやモラルも身につけ、子どもたちの将来にきつと役立つと思います。また、「おはよう」「今日も頑張れよ」と声を掛けると、子どもたちからも元気のいいあいさつが返ってきます。交通指導をとおしてコミュニケーションがとれたおかげかなと思いますね。

※発表者の文章は原文のままではなく、要約して掲載しています。ご了承ください。



1_ かき氷、焼きそばや焼き鳥などの出店には列ができる。2_ ヨーヨーつりやくじ引きなど子どもに人気の出店も立ち並ぶ。3_ 「わっしょい」のかけ声と共に区内を回る子どもみこし。

強さをあらためて振り返ります。

小さいここの積み重ね

なぜ、青葉台区はこのように区内で協力体制がとれているのでしょうか。その理由を高宮茂巳区長はこう話します。「青葉台区は30、40年前、よそから来た人がほとんどでした。その人たちが、この地区で一生暮らしたいという気持ちが強かったのだと思います。祭りで使ったみこしは住民手作りのものだし、昔は地区内で運動会をやっていました。このような小さな行事の積み重ねで住民同士がつながってきたのではないのでしょうか。特に、青葉台区は役員を1年交代としています。みんなが役員の大変さを経験するから、お互い協力し合おうという気持ちがあるのでしょうね。そういう場でコミュニケーションがとれるので、今では顔の見える付き合いができています。どの行事でも、住民の皆さんの協力が得られなければ活動できません。今の青葉台区があるのも、日頃から人と人のつながりができているおかげだと思っています。」

青葉台区はこうした経験を積み重ねて、地域の絆をつないでできたでしょう。

地域でつながる

あいさつを通して自分と相手との間にコミュニケーションが生まれれば、人と人をつなぎ、地域のつながりへと広がります。そして地域が繋がれば、そこから多くの可能性が生まれます。

現在、町内の各々域では、祭り、文化祭や伝統行事など、さまざまな催し物が行われています。これらができるのも、そこに暮らす人たちの間にコミュニケーションが生まれ、お互いに協力し合っているからではないでしょうか。

そこで、青葉台区で行われた「青葉台夏祭り」から、地区内でコミュニケーションがとれている理由を探りました。

青葉台区(高宮茂巳区長)には、353世帯、887人が暮らしています。昭和55年に自治会が設立され、翌56年から夏祭りが開催されました。悪天候などで中止の年もありましたが、ほとんど毎年行われています。今年の開催については、5月の役員会で日程や内容などが検討され、歌や踊りの出演者や出店の募集をしたり、プログラム作りや店の配置などを決めたりして準備を進めてきました。

この祭りには、たくさんの方が協力しています。子どもみこしを担当する子ども会も、子どもたちがみこしを担いで区内を練り歩く間、その見守りと給水の準備を行いました。また、そのみこしが安全に回れるように、体育部の役員が交通誘導を行い、安全確保に努めました。さらに、祭りの最中には、自衛消防団が地区内を巡回し、防犯に努め、住民が楽しく祭りに参加できるように配慮がなされていました。

夏祭り実行委員長の鈴木信吾さんは、「出演者に快く発表してもらうため、出演順や時間などの連絡には直接声を掛けていました」と気遣いを忘れません。公民館長の岡田惇さんは、「準備や撤収は、役員だけでなく各家庭からも積極的に応援に来てくれたおかげで短時間で済みました」と、青葉台区の絆の



副会長(夏祭り実行委員長)
鈴木 信吾さん

青葉台区は、日頃からの活動をとおり自然とコミュニケーションがとれているので、皆さんの雰囲気がとても良いんです。だからこそ、夏祭りも皆さんの協力があって、成功できたのだと思います。



副会長(公民館長)
岡田 惇さん

数年前に県外からこの青葉台区に越してきました。今は公民館長を任されています。公民館では毎日のように住民の皆さんが集まって、いろんな講座をしています。仲の良い地域だなと感じましたね。



夏祭りに参加した
岡本 民也さん
陽子さん

夏祭りでは、青葉会の女性有志が「手のひらを太陽に」など2曲をコーラスし、私はハーモニカで伴奏しました。夏祭りは、普段会わない人ともつながることができるので、毎年楽しみにしています。



夏祭りに参加した
栗原 祐人さん
奏美さん

僕は焼きそばを食べたりして、出店の人に「おいしかった。ありがとう」と話をしました。妹は子ども会のお姉さんたちに遊んでもらっていました。夏祭りをとおして地区の人と仲良くなれたと思います。

小さいここの絆のある町へ

私たちの1日は「おはよう」から「おやすみ」まで、多くの場面であいさつを交わしています。そのたびに私たちは、人とのつながりを築いているのです。たった一言ですが、あいさつの力はとても大きいものです。あいさつをされると誰もがうれしく感じるでしょうし、あいさつをされると、誰もがすがすがしく感じるでしょう。

あいさつをすることは、ときに勇気がいることかもしれません。しかし、自分からその一歩を踏み出せば、相手はきっとその思いに応えてくれます。そのつながりで、コミュニケーションの輪が広がっていきます。

まずは、家族に「おはよう」「ありがとう」と言えるようになりましょう。そして、地域の人に「こんにちは」と話し掛けられるようになりましょう。そうすることで、この町の人はつながり合い、さまざまな場面で助け合える絆の深い町になっていくでしょう。

一人では、悩みを抱えることも多いと思います。そんなとき、私たちの周りにはあいさつを通してたくさんの人たちとつながっていることを思い出してください。

特集 その一言から絆は生まれる。終



青葉台区長
高宮 茂巳さん

夏祭りから
始まる絆。